

## 子どもとの出会いの中で学ぶこと

④

——年少児・Tと敬老の日の「お便り」その2——

水 沼 昭 子

敬老の日のお便りの一件から教週間がすぎ、ほとんどの子供はそれぞれの手紙をポストに入れた。Tは、そうした中で時には仲間達のかく「お便り」の絵をみていたり、切手をはる手伝をしたり、ポストと一緒にいたりした。けれど「ぼくもしたい」とは、なかなか言ってはくれなかった。まったく関心を示さない様な遊びを続けながら、でも、Tの全身から、今、一番気になることが「おばあちゃんへのお便り」であることが感じとれた。

母親と話し合いをもつ。幼稚園の活動の中で、いつまでに、これをしなければならないと言った思いを避けていること、結果ではなく、創り出し、動いている過程を大切にしたこと、だから、Tが周囲の子どもの「お便り」への関わりを見ながら、やってみたくなる時まで待ちたいこと、たかが一枚

の絵なのに、と簡単に考えてしまふ大人側の思いではない、Tの思いを大事に待ちたいことをお話する。私達、現場にあつて、どうしてそうするのか、なぜそうしないのか、など細かい部分をあまり家庭に伝えないでいたことを思った。そうした事で、親の願いと私達の思い、保育の視点のギャップでできた、エア・ポケットに落ち込んでしまふ子どもを思った。両親教育とは——と構える以前の、そうした細やかな伝え合い、働きかけが重要なことなのだと知らされた。

Tのおばあちゃんの分の封筒や切手、そしてスナップ写真が担任のT先生のつくえにそっといつまでも置かれてあつた。

「せんせい、ぼくのところにネ、お返事来たよ！」子供達の出したお便りの返事が届きはじめた頃、Tは数人の仲間巻き

込まれる様にして、ドラエモンを描いた。いつでも自由に使える子ども達の作業台のコーナーから紙をとり、うれしそうに描いて担任にみせた。"すてきにかけたね、おみやげにするの？" Tの組では子供たちがおみやげにしたい時は、いつでもリボンで絵をむすんでもらえる。子供の選んだリボンをかけて、一枚の絵も、小さな折り紙も大事なおみやげに変身する。Tは"先生にあげる"とその時言った。この時担任は"これ、おばあちゃんのお便りにしない？"と言いたかったに違いない。けれど、ただ"そうありがとう"と受けとった。翌日登園するTに担任の"お礼"のことが待っていた。また、ドラエモンをかきはじめる。いままでTの遊びは結果がはっきり出る様なものはほとんどしないでまた、そのTが何枚も、ドラエモンを描いて先生に届ける。数枚のドラエモンを手に先生はTに問いかける。"この中からおばあちゃんのお便りみつけない？" "そうしてもいいよ" Tの何となくホっとした様な表情と共に答が返って来た。彼が一番気に入った絵が選ばれ、とうとうTはお便りを自分で投函した。運動会も間近な時だった。

Tは新しい経験にとっても敏感な子供である。そして他の子供が何気なく先にしてしまったその結果にも神経質な子である。ほんとうはやってみたいのだけれど、"いやだ"といってしまうタイプのT。その子の投げて来たこの大きなサインの

前で、いかに"子供の思いに立った園生活"が保育者側の思いに立ったものであったか、さらに、子供の動きや願いを大切に考えたながら、結局は保育者側の願いや枠の中へ入れ込もうとしてしまう現実を、Tのこの出来事がまるでX線の様に我々側の姿勢を写し出してくれた。子供のその時々動きを、心の動きや願いを受けとめきれない"何か"、皆と一緒にいていいのだと思いつつ、皆と一緒にさせようとする"何か"、今この子に一番大事にしてやりたい事をわかっていながら、保育者の思いを振りまわす"何か"——この"何か"をいつも心にとめて、みつめなければならぬと思う。

Tは年長になった。まだ、物事への敏感な対応をあちこちにみせながら、でも、ずいぶん遅しくなった。担任との関わりも深くなり安心した表情がいつもあつてうれしく思う。

年長になったある日"おおきいくみになってキャンプをしたり、ほら、クリスマスには、イエスさまの劇をするね、小さい組のとき、みせていたでしょ？" 何気ないT先生のことばに"あ、あれ、いやだな、どこか、違う幼稚園いっちゃおうかな"と、ちょっとふざけた調子だが、まぎれもないTのこの一言に、T先生も、居合せた私も、年長でのTとのいろいろな出会いを思わずにはいられなかった。

(千葉・愛隣幼稚園)